「空虚で愉快な旅」
--ベンヤミンがカフカに見た「騎行」--

小　林　哲　也

はじめに

ヴァルター・ベンヤミンは、フランツ・カフカが没して 10 年後の 1934 年に『ユダヤ展望』誌への掲載に向けて、カフカについてのエッセイを書いた。[1] 33 年の 3 月以降、ベンヤミンはドイツから亡命し、パリ、スヴェンボルなど各地を転々とする生活を送っていた。例えば、ハンス・マイヤーは、こうした亡命生活や、32 年の自殺未遂といったベンヤミン自身の状況と合わせて、彼のカフカ論が「挫折者」の暗さを反映するものだと指摘している。[2] たしかに、彼のカフカ論の背景は暗い。だが、ベンヤミンのカフカ像で注目に値するのは、希望を欠いた状況下での「祈り」のみではない。むしろ、彼がカフカから快活なものや、落ち着き、そして疾走感をとり出してくる点にこそ注目されるべきである。

ところでベンヤミンのカフカ論に関しては、ベンヤミン自身を反映させる「曇った鏡」[3] だと言われることもあるが、仮にそうだとしても、彼のカフカ論を読み解くことの意義それ自体が減ずるわけではない。ベンヤミンでしか描けなかったであろうカフカ像から、逆にカフカ自身に光が当てなおされるということも十分にあり得る。ただ、「カフカ像」といっても、ベンヤミンは統一的な人格としてのカフカを描き出すことを目指しているわけではないむしろ、彼はカフカ作品に現れる個々のモティーフ、描かれる身振りを熟考の対象とし、個々のモティーフの連関の中でカフカ的思考を振動させるとでもいったことを目指しているように思われる。それゆえ、カフカを一つの図式あるいは、一つの教理でもって裁断するような解釈--例えば神学的解釈や精神分析的解釈、あるいは実存主義的解釈--にはないような思考の運動と、豊穣さがそこに生まれてくる。これらは彼のエッセイの魅力であると同時に、難解さを産み出すものでもある。ベンヤミンのカフカ像を統一された一つの秩序だったものとしてとり出してくるのは非常に難しい。ベンヤミンは、様々なモティーフの連関の中で、カフカ像を浮かび上がらせようとしているが、それぞれのモティーフの関係が明瞭に説明されていないのである。例えば「太古の世界」と「助手たち」といったモティーフがどのような関係にあるのかを説明するのは難しく、さらにそこに「忘却」や「身振り」、「勉学」と「文字」といったものが加われば、もはや収拾のつけようもなくなってくる。[4] それゆえ本稿ではこのようなモティーフの中で、とりわけ「騎行」Ritt に焦点を絞り、これと密接に関連してくる「逃走」「勉学」「愚かさ」「無」「狂気」といったモティーフと照らし合わせながら、ベンヤミンの思考を再展開させてみたい。こうしたモティーフ連関には、これまでさほど着目されていない

---

[1] 『ユダヤ展望』に掲載されたのは「ポテムキン」と「せむしの小人」の二章だが、ベンヤミンはもともと四章立てで書いていた。Franz Kafka. Zur zehnten Wiederkehr seines Todestages. In: Gesammelte Schriften. unter Mitwirkung von Theodor W. Adorno und Gerschom Scholem Hrsg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser. Frankfurt am Main 1991.Bd.II.409-438.ベンヤミンの著作からの引用は以後.同全集（Bd.I-VII）を用い、引用に際しては、巻数、頁数を本文中に示す。ちなみにベンヤミンの比較的まとまったカフカ論としては、他に 1931 年のラジオ講演用原稿と、ショーレム宛の書簡に書かれたカフカ解釈がある。

[2] Mayer, Hans: Walter Benjamin und Franz Kafka. Bericht über eine Konstellation. In: Literatur und Kritik Jg.14(1979), S.579-597.

[3] Erbertz, Carola: Der Blinde Spigel. Überlegungen zu Benjamins Kafka Essay. In: Orbis Litterarum 59(2) 2004, S.114-135.

[4] 以上個々のモティーフについては、例えば以下のモノグラフィーを参照。Jäger, Lorenz: Primat des Gestus. Überlegungen zu Benjamins Kafka Essay. In: Ders./Regehly, Thomas(Hrsg.): »Was nie geschrieben wurde, lesen« Bielefeld 1992, S.96-111, Deuring, Dagmar: “Vergiß das Beste nicht!” 1994, Erban, Marcus: Entstellter und Vergessener Gestus der “Vorwelt”. 2004. 多くのモノグラフィーの難点としては、例えば「ベンヤミンのテクストを一つの文学作品として持上げて、それを一枚岩的に、内在的に読むこと」があるとされる。Honold, Alexander: Der Leser Walter Benjamin. Berlin 2000, S.400. だが、私見によれば、むしろ問題はベンヤミンのエッセイを内在的に読み解ききれず、それゆえ、ベンヤミンの言葉を引いて場当たり的なコメントを連ねる形に終始するだけにとどまることにある。

ように思われるが、他のカフカ解釈にはないベンヤミン独特の思考を理解する上で重要なものである。

ベンヤミンは、カフカにおける「救済」の鍵をこの「騎行」にみている。「救済」といっても「彼岸」を目指したものではなく、ここで問題になるのは閉塞状況からの「逃走」である。閉域の敷居を一歩またぐか、またがないかという境界線においてベンヤミンの思考は紡がれる。閉塞する空気の中で出発できない乗り手、走り出さない馬が、いかにして出発し走り出すのか、どのようにして「騎行」が狂気を孕むほどの速さを得るのか、本稿ではこうしたことを見極めたい。「騎行」の成就の鍵となるのは、「知恵」ではなくて、馬鹿馬鹿しさ、愚かさ、未熟さといったものである。ベンヤミンは愚かしいものに、快活さの源泉を見ている。

> われわれは、希望の担保をあの小さな、完成していないと同時に日常的な中間世界、慰めを与えると同時に馬鹿げてもいる中間世界から得ている。助手たちはそこに住まっている。カフカは、ちょうど怖がることを学びに出かけた例の若者〔『グリム童話』〕のようだ。彼は、ポテムキンの宮殿に迷い込み、最後にはしかし、その地下の袋小路であの歌うネズミ、ヨゼフィーネに出くわす。その歌い方についてカフカはこう書いている。「哀れで短い幼年期の幾ばくかがそこにある。失われ、二度と見つけ出せない幸福の幾ばくかがそこにある。だがまた、活動的な、今日の生の幾ばくかもそこにある。つまり、小さくて把握しがたいが、そこにあって押し殺されず、眠らずにいるものの幾ばくかが。（II.S.416）

この眠らずにいる「今日の生」、この押し殺されずにいる幾ばくかのものが、いかに「騎行」と関わってくるのか。ここに、ベンヤミンのカフカ論の核心があると思われる。だが、まずは閉塞した中で押し殺されそうになっているカフカ、快活さを欠き、袋小路でうなだれるカフカの生を見ておこう。

1　「騎行」の不安

ベンヤミンは 1931 年のラジオ講演で、カフカの描く生が追放された者たちの生だと語っている。こうした生はカフカのみならず時代の経験でもある。

> 今日の人間の肉体は、Kが暮らす城山の麓の村のようなものである。今日の人間は、余所者であり、追放された者であり、体を高次のさらなる秩序へと結びつけるような掟については、何も知らない。事のこうした側面に関しては、カフカがその物語の中に非常にしばしば動物をおいているということが、多くの鍵を与える。〔……〕動物たちはいつも地中の動物、あるいは地中ではないにせよ「変身」の甲虫のように、地面や床を這いずり回り、その割れ目や裂け目に生きている動物たちなのだ。この作家には、このように這いずり回っているということが、彼の世代、彼の環境に属する、孤立して、掟を知らずにいる人々にふさわしいものと思われている。（II.680f.）

測量技師であるKは仕事をしに来た麓の村で、仕事を与えられる事なく、余所者として暮らしている（『城』）。彼は、彼に何らかの指令、許可を与えるだろう城からの知らせを待っているが、「使者」である「助手たち」は知らせをもたらさない（仕事がないのだから、測量の助力にもなっていない）。Kは愚かな助手たちにいらだち、村をそれこそ這いずり回るようにして彷徨いながら、憔悴していく。[5] ベンヤミンは、この城の村と通じるものとして、タルムードで語られている村の話を引いている（1931 年も 34 年も同様の話を引用している）。一人の王女が、言語の通じない村に流され、憔悴して暮らし

---

[5] ちなみに『城』は未完だが、ブロートによればカフカは次のような結末を考えていたとされる。長いこと、安らぎなく権利も与えられない生活の後でKは衰弱し、死の床にいる。そこでついに決定的な知らせを携えた使者が城からおとずれ、Kが、たしかに、村に住む権利はないにせよ、状況に鑑みてここで生活し働くことを許可してもよいと伝える。しかしそのときKはすでに死んでいる。ブロートはこれをカフカの原初的な生活への憧れに基づく「共同体への参入」として自身のシオニズムと結びつけるように捉えている。Vgl. Kafka, Franz : Das Schloss. New York 1946, S.481f.

ている。あるとき彼女に知らせが届く。王女の婚約者は彼女を忘れてはおらず、彼が村に向っているというのである。言葉の通じないこの村で、王女には嬉しさを伝える手段が他にないものだから、彼女はただひたすらに饗宴の食事を整える。村は身体を、王女は魂を、婚約者はメシアを意味する（Vgl.II.424, 680）。

この「メシア」が到来するのかどうかは語られない。だが、ベンヤミンの見方を展開させれば、「メシア」はやって来ていないのだろうと考えられる。ベンヤミンはこの話をカフカの「皇帝の使者」[6] と引き比べている。そこでも皇帝からの使者は、夢見がちに窓辺で待っている「おまえ」に向けてたしかに出発している。だが、階段また階段、宮殿また宮殿、さらには広大な帝都を通り抜けねばならないこの使者は、決して「おまえ」のもとにたどり着きはしない。カフカの世界では「使者たち」は希望をもたせながら、しかしその希望を成就させることはない。「異郷」としての村には何も到来しない。といって、カフカの世界では、村から駆け出して逃げていくということも簡単ではない。

こうした「村の空気」にカフカの作品は満ちていると、ベンヤミンは言うが、この村は、例えば同じ村でも老子が語る村とは異なっている。老子は、次のように或る種の理想郷としての村について語る。

> 国は小さく、
> 人は少なくて構わない。
> 〔……〕
> 隣の国は目の届くほどのところにあって、
> 雄鶏や犬の叫びを
> 対岸に聞く事ができるほどかもしれない。
> それでも、人々は齢を重ねて死を迎えるということだ。
> あちこちへと旅することなどもせずに。[7]

「宗教の創始者」である老子が語るこの小さな国は、「小国寡民」の理想を体現するものであるが、[8] ベンヤミンによれば、カフカはこれを「隣村」という話へ書き換えている。小さな国から出る必要も感じずに満ち足りた生涯を過ごすという理想を老子が語るのに対して、カフカが村の老人に語らせるのは、ほんの隣の村にもたどり着けないかも知れないという不安である。

> 人生は驚くほど短い。今追想の中で、人生が押しよて来るので、例えば、どうして若い人間が、隣村への騎行 Ritt を決心するのかほとんどわしには理解できん。不運な偶然を度外視するにしても、普通の幸福に流れる人生の時間からしてすでにそのような騎行をするのに足りないほど短いかもしれないのに、やつらはそれを恐れもしない。[9]

村から出る必要もないという老子の満ち足りた気持ちは、ここでは否定的に変形され、村から出ることなど思いもよらないという老人の不安へと書き換えられている。若者たちはこの村からの騎行を決心している。だが奇妙な事に、人生の短さを考慮する老人にとっては、「隣村への騎行」の成就は思いもよらないものになってしまっている。この奇妙な話は『田舎医者』の中で「皇帝の使者」の前におかれており、両者は或る種対応するものだと考えていいだろう。使者が道のりの長さ故にたどり着けないのに対して、老人の場合は人生の短さ故に、隣村への道のりでさえ踏破できない。その麓まで来ているのに意志の疎通が不可能な城や、目の前で空いているのに入れない門（「掟の前」）など、カフカの世界では、ただ敷居をまたぐだけのことが何故

---

[6] Kafka, Franz: Drucke zu Lebzeiten. Herg. v. Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann. Frankfurt am Main 1994, S.280-282.

[7] ベンヤミンが使用した次のドイツ語訳から引用。Laotse: Tao-te-king. Das Buch vom Sinn und Leben. Übersetzen von Richard Wilhelm. Köln 1984, S.80. ちなみにベンヤミンは「若さの形而上学」においても同じ箇所を引用している。（II.S.96）

[8] 『中国の思想［VI］老子・列士』（奥平卓／大村益男 訳、徳間書店 1996 年）118～120 頁参照。

[9] Kafka, Franz: Drucke zu Lebzeiten. S.280.

か成就されない。

成就しないことにまつわるこうした不安は、例えば「日々の混乱」[10] として、すれ違いの中で目標から絶望的に遠ざかっていく感覚として描かれている。ベンヤミンもこれを「隣村」に通じるものとして捉えている。（II.1197）商談のために「B」に会いたい「A」は、いつもなら10分で着く道のりに、何故か何時間もかかってしまい、こらえられなくなって「A」のもとへ向かって出て行った「B」とすれ違う。いてもたってもいられぬ「A」は、「B」のところで彼が戻ってくるのを待たずに、自分のところへ引き返す。部屋で「B」が待っていると聞き、やっと会えると思って部屋への階段を昇ろうとしたと思うと、「A」は階段にひどく膝をうちつけてしまいうずくまる。そしてその横を怒った「B」が帰っていくのを無惨に眺める…。[11] こうしたすれ違いは、日常の単なるアクシデントであるように思われるが、カフカが「偶発事そのものをあたかもカタストローフェであるかのように受け取る男」（II.1256）であるとすれば、こうしたすれ違いがもたらす出来事は、彼にとって決定的な破滅を意味するものであり得る。ほんの隣の村への騎行さえ決行できない不安、そしてほんのわずかなすれ違いに対する恐れ。ベンヤミンは、こうした不安や怖れが、何かしらの形でカフカの中で「時間の歪み」を生じさせていると見ている。そこでは、わずかの時間しか占めるはずのない行為が、短い人生では間に合わないほどの長さにまでなってしまう。こうした時間は、行為を測る尺度として歪んでしまっている。

「騎行」は、不安によって歪んだカフカの世界においては困難に絡みつかれ、その成就が阻まれている。カフカが「インディアン」のように疾走する「騎行」をあれほどに夢見たのは、まさに「騎行」が難しいからであったのかもしれない。そしてカフカにとって、それが難しかったからこそ、「騎行」の成就は格別の意味を持ったのかもしれない。ベンヤミンは「インディアンになりたい」というカフカの願望とカフカの悲しみとについて次のように言っている。

> あの熱烈な「インディアンになりたい願い」は、この大きな悲しみをのみ尽くしたこともあったかもしれない。「もしインディアンになれたなら即座に準備して、疾駆する馬の上で、風を切り、くりかえし小刻みに身を震わして、ふるえる地面の上を、ついには拍車を投げ捨てるまでに、だって拍車はないんだから、そしてついには手綱を離すまでに、だって手綱などないんだから、そうやって駆けるんだ。そうして刈られた荒野のように前に広がる大地はほとんど目にもとまらなくなって、もう馬の首も、馬の頭もなく」。この願いには多くのことが含まれている。成就してはじめてその願望の秘密は明らかになる。（II.416f.）

この「願望の秘密」をベンヤミンがどこに見ているのかは後で述べるが、「騎行」、「逃走」としての「騎行」が「救済」と関わっているということが、さしあたりここで確認されておいてよいだろう。カフカにおいては、「ほんの偶然事がカタストローフェになる」のに対応して、ほんの隣の村への「騎行」、あるいは「逃走」の成就にこそ「救済」がかかってくる。クラマーも指摘しているが、ベンヤミンがカフカにおいて見出す「救済（Erlösung）」は「彼岸」に関わるのではなく、「いまここ」で現実的に問題になるものである。[12] ベンヤミンは実際、「救済は存在Daseinへの報奨金Prämieではなく、人間の最後

---

[10] Kafka, Franz: Nachgelassene Schriften und Fragmente II. Herg. v. Jost Schillemeit. Frankfurt am Main 1992, S.35f. もともとタイトルはなかったが、ブロートによって Ein alltägliche Verwirrung（日々の混乱）と題された。

[11] こうしたすれ違いの恐れは、おそらく、多くの人がいだく不安だが、カフカはこれを鮮明にしている。ちなみにアグノン（ゲルショム・ショーレムはこのアグノンとカフカの親近性を強調している）の「丸ごとのパン」の話には、より現実的な形で、このすれ違いの不安が描写されている。『ノーベル賞文学全集―ジョン・スタインベック；シュムエル・ヨセフ・アグノン』（村岡崇光他訳、主婦の友社 1971 年）所収。

[12] 「もしメシアの到来とともに、全く別の状態が要求され得ない場合、なお問題になるのは、目下の世（Aeon）のなかで、ひとつのふさわしい生き方を、その世へとおかれた者達のために生み出すことだけである。運動の戦略が探究されるだろうが、それは、まったく別の状態を物欲しそうに眺めるものではなく、むしろ、思惟と行動にとっての現実的な可能性において救済の形象を開くものを、いまここで役立てようと努めるのである。」Kramer, Sven: Rätselfragen und wolkige Stellen zu Benjamins Kafka-Essay Lüneberg 1991, S.36.

の脱出路Ausflucht」であると言っている。いま此岸にあるものが後に彼岸で報いられ救済される、といったようなことを彼が考えていないのは明らかである。カフカが言うところの「自分の額の骨によって道をふさがれている」人間は、ただ自分の額の骨に塞がれた道とは別の「逃げ道Zuflucht」を見つけることで「救い」に至ることがありうる（II.423）。実際例えば、『アメリカ（失踪者）』[13] のカール・ロスマン（直訳すれば馬男カール）は、常に疾走している。彼は苦境に陥るたびに、繰り返しそこからの逃走を試みて走り出す。カールにとっての「救済」も「騎行」の成功、「逃走」の成功にかかっている。

２　「逃走」のゆくえ

このように「逃走」に「救済」を見るベンヤミンの解釈は、ドゥルーズ／ガタリのカフカ解釈（『カフカ--マイナー文学のために』）を或る意味で先取りしている。ドゥルーズらは、父の秩序＝「オイディプス的閉域」から「逃走」し、「脱領域化」した新たな空間へと「接続」していく「欲望」をこそカフカに見出すべきであると言っている。カフカにとっては「服従に対立する自由が問題なのではなく、単に逃走の線、あるいはむしろ《右でも左でも、どこでもよい》単なる出口、可能な限り最も意味のない出口が問題なのである」。[14] 彼らの姿勢は、「否定神学または不在の神学」の拒否においても、ベンヤミンと一致するのだが、[15] しかし、両者が描き出す「逃走」の質はいさ

[13] 『アメリカ』はマックス・ブロートのつけたタイトルで、批判版全集ではカフカのつけたタイトル『失踪者』に変更されている。本稿ではベンヤミンに合わせて以後『アメリカ』と表記する。

[14] ジル・ドゥルーズ／フェリクス・ガタリ『カフカ--マイナー文学のために』（宇波彰／岩田行一 訳、法政大学出版局 1978 年）、8 頁

[15] 例えば、ゲルショム・ショーレムのカフカ解釈は、こうした「不在の神学」の一つと考えられる。ショーレムはカフカ解釈の中心に「掟」を据えるべきだというが、その際彼は、カフカにおいては「掟」がポジティヴなものとして措定されず「無」としてあると考えている。「掟」が不在の世界の中でいまだ訪れぬ啓示を予感する者として、ショーレムはカフカを捉えているが、ベンヤミンはこうしたカフカ像に対しては批判的である。「掟の概念はカフカにあっては、圧倒的に見せかけの性格をもったものであり、実際イミテーションなのだ」Benjamin, Walter: Gesammelte Briefe. Hrsg.von

さか異なってくる。ドゥルーズらは、前へ前へ、横へ横へと逃走の線を「隣接させていく」ことを強調する。彼らもカフカの世界に頻出する「袋小路」の存在を認めないではないが、あくまで「袋小路」を回避する形でカフカから「逃走の線」を引っぱっていく。彼らの言う「逃走」はあくまで軽やかである。ベンヤミンの捉えたカフカにおいては、「騎行」＝「逃走」はこのように軽やかではあり得ない。そこでは、「騎行」に出るか出ないかの敷居からしてすでに途方もないほど高い。実際例えば『アメリカ』におけるカールの逃走のゆくえを見れば、カフカにおいて「逃走」がそれほど軽やかでなく、またその成就が難しいのは明らかである。ベンヤミンはこうした「逃走」の困難を見極めた上で、「逃走」に孕まれた可能性を展開させていく。ここではまずカールの「逃走」の困難が確認されねばならない。

カール・ロスマンという「完全な名前」を与えられた少年は、カフカの他の長編小説の主人公と違って、作者から祝福を受け、それゆえ新天地で再生を果たすかのようにも思われる。だが、実のところ彼の「逃走」はすでにフロンティアをもたなくなった新天地で繰り広げられるものであり、そこに待ち受けているのは、失業や転落者の生活であり、カールは袋小路にぶちあたる。袋小路からの逆転をはかるかのような弁明が繰り返しなされるが、そうした弁明は、船の火夫のそれも、カールのそれも、いつも失敗に終わる。例えば、ルンペンのロビンソンにまとわりつかれたばかりに、カールはエレベーターボーイの職を失うはめに陥る。このときカールが本当は何ひとつ悪くないと知っているのは読者ばかりである。

> 「だから僕に罪があるんです」とカールは言いかけて間をおいたが、あたかも裁判官から好意のある言葉を待っているみたいだった。そうした言葉は自己弁護をつづける勇気を与えてくれるかもしれなかったが、言

Christoph Gödde und Henri Lonitz. Bd.IV. Frankfurt am Main 1998,S.526(an Werner Kraft. 1934 年 11 月 12 日).カフカをめぐってのベンヤミンとショーレムとのやり取りに関しては三原弟平『カフカ・エッセイ--カフカをめぐる七つの試み』（平凡社 1990 年）10～73 頁を参照。

葉はなかった。「僕に罪があるのは、ただあの男、ロビンソンという名前でアイルランド人なんですが……彼を寝室へ連れて行ったことです。でも、彼がいろいろ言ったことは、酔っぱらって言ったことですし、正しくないです」。[16]

弁明は失敗する。カールは「もし善意がそこにないなら、弁明するなんて不可能じゃないか」[17] と心中つぶやくが、そうすることで自分の運命をあやつる作者に抗議するかのようである。ブロートは、「野外劇場Naturtheater」＝「自然劇場」での救済という構成を試みてカフカの遺稿を整理し『アメリカ』として出版したが、カフカ自身はこの罪なきカールが殺されるという結末を考えていたようである。[18] ブロートは、堕落した文明に対立する「自然Natur」を、オクラホマの劇場に冠して、或る種の救済の構図を『アメリカ』につくろうとしたと言われるが、カフカ自身はこの「自然」という言葉を使っておらず、「自然」は、ブロートによってつけられた章のタイトルにあるだけである。[19] ベンヤミンも、ブロート編集版に依って「自然劇場」への逃走路がカールの救いだと一方では言っている。だが、彼に向けられた祝福の偽物性を言うことで、留保をつけてもいる。「自然劇場」への採用が決っての祝祭の場面についてベンヤミンは次のように書いている。

今や自然劇場に職を得た皆が、白い布で覆われた長いベンチについて、ごちそうにあずかる。「みな陽気で興奮していた」。祝いのために、脇役たちによって天使の装いがされる。かれらは、その内部に階段をもっている高い台座の上にたつ。台座は波打つ衣装によって覆い隠されている。田舎の教会の歳の市のしつらえである。またこれはひょっとすると子供の祭りのしつらえで、ここでなら、われわれが言及した、服に締め付けられ、飾り立てられた少年〔カフカの少年時代の写真のこと〕もその眼差しの悲しみをなくしたかもしれない。--もしもこの天使たちの翼が結びつけられたものでなかったなら、ひょっとすると本物の天使であったかもしれないのだが。（GS.II.423. 傍点引用者）

「かもしれない」という留保表現によって、ベンヤミンが、ここで「救済」と「祝福」とが皆に与えられているとは考えていないことがわかる。少なくとも「救済」をここで断言することはできない。実際『アメリカ』でのカールは、この天使たちの祝福を喜びながら、とまどい、訝っている。劇場では役者として雇われるわけではなく、自分のできる事、自分の申し出に沿う形で雇われる。ベンヤミンの言い方で言えば、この劇場では「自分自身を演技する」ということ、つまり「自分自身であること」、「自然」のままでいることを許されるわけだが、面接官の質問を受けるカールはとっさに名前を「ネーゲル（ニグロ＝黒人）」と偽ってしまう。そして彼はそのまま「技術労働者ネーゲル」として雇われる。自分自身であるだけで受け入れられるこの劇場は、言い換えれば労働力であれば誰でも受け入れる劇場であって、そのようなところで救済されるだろうとは、あまり考えられない。むしろ、カールが新たな袋小路へと入り込もうとしていると考える方が自然である。

こうした疑わしさをやはりベンヤミンも見て取っている。就職を祝福した天使たちは救いを告げるものだとは言えない。同様に、カフカにおける天使たちは、あるいは人間が悲しみに陥っていくものを悲しく見守る存在であり、あるいは犯罪者を罰の場へと連行していく存在だとベンヤミンは指摘している。

---

[16] Kafka, Franz: Der Verschollene. Hrsg. v. Jost Schillemeit. Frankfurt am Main 1983, S.243.
[17] Kafka: a.a.O. S.245.
[18] 1915 年 9 月 30 日の日記にこうある。「ロスマンとＫ。罪なきものと罪あるもの。結局はどちらも区別なく罰されるかたちで殺される。罪なきものは、優しい手つきで、ぶち殺されるというよりは、むしろ脇へと押しのけられるように」Kafka, Franz: Tagebücher. Herg. v. Hans-Gerd Koch, Michael Müller und Malcom Pasley. Frankfurt am Main 1990, S.757.
[19] このような恣意的編集も含めたブロートの遺稿編集の「粗雑さ」、およびブロートの「功罪」に関しては、明星聖子『新しいカフカ』（慶応義塾大学出版 2002 年）を参照。

カフカ作品には、〔ほんものの翼をもたない〕こうした天使たちの先駆けがみられる。興行主がこうした天使たちに属するが、彼は、「最初の悩み」に見舞われて、列車の荷棚に登った空中ブランコ乗りのそばへ上がり、彼を撫でさすり、彼の顔を自らの顔に押し付ける。「それで彼もまた空中ブランコ乗りの涙によってずぶ濡れになるのだった」。もう一人の天使は、守護−天使 Schutz-Engel、あるいは警官 Schutzmann であり、殺人者シュマールが「兄弟殺し」をした後で、その面倒をみる。シュマールは、「口を警官〔守護者〕の肩に押しつけて」軽い足取りでこの警官に連行される。（II.S.423）

「天使」である興行主は、「最初の悩み」に陥って涙するブランコ乗りの顔に皺が刻まれて行くのをはっきりとみるが、この悩みから彼を解放することはできずに、自分も彼の涙でずぶ濡れになってしまう。警官に対して逃げ口上は通用せず、彼は黙ってシュマールを連行する。小唄さえ歌わないこの引かれものシュマールには、何らの救済も予感されない。例えばカールに親切だった女のコック長も「最善の先入観をもってカールのところへ駆けつけた」が、事態のなりゆきに抗えずに、この「先入観」を捨ててしまう。コック長の信頼によって、すべてが反転し、事態がひっくりがえる可能性をカールは期待していたのだが、そして、読者もこの希望を見守っているのだが、残念な事にこの反転は成就しない。

３　「勉学」は「無」に帰する？

祝福されているようで、祝福されていないカールの願望は成就することなくそのつど無に帰した。新天地で人生を打ち立てようと、カールはそのつど努力した。最初叔父のもとでは恵まれた環境で英語や乗馬をならい、次いで最初よりも恵まれないとはいえ、ホテルでは新たに下積みとしてエレベーターボーイを務め、仕事の合間には商用通信文の勉強をする。だが、ホテルから追放されたカールは、警察にまで追われるはめになって、勉学からも幸福な人生形成からも道を閉ざされてしまう。警察からの逃走は、元ルンペンで今はヒモのドラマルシュの助力によって成功する。だがカールは今度は、ドラマルシュたちによって召使いにされそうになる。逃げようともがいて失敗したカールは、その際できた傷の具合を確かめにバルコニーに出て、隣のバルコニーで勉強している学生に出会う。この学生は、いささか滑稽な身振りで一心不乱に勉強している。

> カールはどのようにこの男が本を読んでいるのかを見た。ページをめくっては、電光石火の速さで本また本とつかみ取ってきて何事かを参照し、頻繁にノートにメモを記入していたが、その際いつも驚くほど深く顔をノートへと沈めるのだった。／−−たぶんこの男は学生ではなかろうか？いかにも勉強してますって感じに見えるぞ。もうだいぶ昔のことだけど、家ではカールも同じように、両親の机にすわって、宿題をしたものだった。〔……〕いったい、自分の勉強全体にどんな目的があったんだろうか！自分はいっさい忘れてしまった！ここでも勉強を続けるのが大事だとしても、それもどうやら彼には難しいことなのだ。カールは、故郷で一ヶ月もの間病気だったことを思い出した。それから、勉強を再開して立て直すのに、どれだけ苦労したことか。そして、商用通信文の教科書以外はもう長い間本など読んでいない。[20]

大学生はカールに妨げられて集中の糸をきらす。「ぼくは残念ながら神経質なんで、もとにもどるのに時間がかかるんだよ。きみがバルコニーをうろうろしてから勉強が手に付かない」。[21] こう言った学生は、召使いにされかかっているという事情をカールから聞くと、親しげな様子を見せて自分のことを話し出す。彼も昼間は「百貨店の売り子」をやって、夜は好きでもないブラックコーヒーをすすりすすりほとんど眠らずに勉強している。彼は仕事中

---

[20] Kafka: Der Verschollene S.342f.
[21] a.a.O.S.346.

に眠らないために昼も事務机にコーヒーのびんを隠しているから、店の連中には「ブラックコーヒー」と呼ばれているという。カールにとって学生は、何らかの逃げ道を与えてくれる可能性のある希望の糸である。だが学生自身の将来には希望はない。[22] この学生の勉学も成就しそうにはないのである。

「それで、いつになったらあなたの研究は完成するのですか？」とカールはたずねた。
「そろそろだな」と頭をうなだれて学生は言った。彼は手すりを離れて、ふたたび机に着いた。開いてあった本に肘をついて、両手で髪をかきむしりながら、彼は言った。「まだ、一年か二年かかるかもしれない」。
「僕も勉強したかったんですよ」とカールはいった。自分の状況を語ったら、今は黙ってしまった学生がさっきまでカールに見せていたのよりも、もっと大きな信頼を自分に見せてくれるだろうと期待するかのように。「そうか」と学生はいって、また本を読んでいるのか、それとも散漫に頁を凝視しているのかはっきりしなかった。[23]

学生は、現在の状況から抜け出そうと勉学に励んでいるが、「いんちき博士が掃いて捨てるほどいるアメリカ」では、「将来の希望」など持てないと、いささか卑屈である。電光石火の速さで本をとりだす彼の一心不乱の身振りは、虚しさに彩られている。自分のしていることが馬鹿馬鹿しいことではないかと考えるほどの「賢さ」を彼はもっており、それゆえカールにはドラマルシュたちの召使いになることを勧める。ここには袋小路からの逃走の道筋は示されていない。

[22] ベンヤミンは、カフカの作品の中で唯一希望があるものとして「助手たち」がいると言っているが、学生をこのグループに組み入れている（II.434）。だが同時に、「ノートに深く顔を沈め」てうなだれる学生は「まだ救われていない」というように、その希望のなさも見ている（II.435）。
[23] a.a.O.S.348f

４　「順風」という「嵐」

学生やカールの逃走をはばむのは目の前の袋小路だけではない。ベンヤミンは、前へ前へと人間を追い立てる「順風」について語っている。「「最下層の死の領域から」、彼に順風が吹いて来る」（II.436）。ぶちあたった袋小路では彼らを前へと追いやる風が、後ろから嵐のように吹いている。もちろんこのまま前へは進めないのにである。カールは別として学生に関していえば、彼が袋小路にいるのはむしろこの風にふかれたがためであるとさえいえる。この風は、学生が未来に立てた目標にたどり着くより前に、その目標をさらに前へと吹き飛ばしてしまう。研究の終わりを「そろそろだな」と言ったその瞬間に風は学生を追い越してその成就を先へ延ばす。それゆえ学生は「あと一年か二年」と訂正せねばならなくなる。未来に向けた願望は、『アメリカ』でさえ成就することがない。あるいは『アメリカ』だからこそと言うべきか。ともかく、学生は「勉学」という馬に自らをしばりつけ、この馬は成就という目標を目指して走ろうとはするが、順風に駆り立てられて焦った学生の願望の速さにはとても追いつかない。そしてこの学生の速さといっても、ノートをめくる手の速さなのであって、前に進む速さではない。それゆえ馬の方でも人参を吊られて袋小路で堂々巡りしているといった体なのである。馬自体が手綱をぶっちぎって乗り手を引き離した「空虚で愉快な旅」[24] をくりひろげるということもない。

この「学生」の「勉学」＝「騎行」は不運なものだが、ベンヤミンは同様に「不運な騎手」として「バケツの騎手」を挙げている。第一次大戦中の燃料不足を背景に書かれた「バケツの騎手」[25] では、寒さに耐えられなくなった男が「バケツの騎手として、バケツの握り、この単純極まる手綱に手をあて、骨折りながら階段を回っておりていく」。彼が向かうのは石炭屋であるが、彼には金がなく、握るのは空のバケツだけである。彼が「乗ってこられるほど軽い」そのバケツは石炭という目標へ向けて走る馬であるが、乗り手の意

[24] Vgl. Kafka: Nachgelassene Schriften und Fragmente II. S.123.
[25] Kafka, Franz: Nachgelassene Schriften und Fragmente I. Hrsg. v. Malcolm Pasley. Frankfurt am Main 1993, S.313-316.

にかなわないそのバケツは、自らの乗り手を暖房のない「氷山地帯」へと押し返す。バケツは、乗り手の願望よりも石炭屋のおかみが見せる無慈悲な現実に忠実であった。ベンヤミンはこの「騎手」の不運を、未来の目標に願望をしばりつけたものの不運と解釈する。

> その駄馬に鎖で繋がれた騎手は不運なものだ。というのは、彼は未来の目標を前提にしてしまったからである。--目標がたとえ最も手近の、地下の石炭貯蔵庫であってもこれはかわらない。彼の動物もまた不運だ。バケツもそれに乗る乗り手も不運なのだ。〔……〕ここで開けて来る「氷山地帯」よりも希望のない地域はない。その中でバケツの騎手は、永久にさまようことになる。
> 「最下層の死の領域から」、彼に順風が吹いて来る。(II.436)

この「順風 der Wind, der ihm günstig ist」は、もはや騎手にとって都合のいいものではなくなっている。空のバケツは、この風を受けて騎手を「氷山地帯」へ運んでいく。駄馬にしばりつけられた騎手は、目標には達しない。学生が机にしがみつくのは、こうした「順風」に吹き飛ばされないためであり、本を取って来る速さが電光石火なのは、この風よりも速く目標に達するためである。だが、本を取るだけでは走り出すことにはならない。

「順風」は、人間相互の関係も吹き飛ばしていく。「人間がお互いに極めて疎遠になってしまって、唯一の結びつきも、見通し難く媒介されたものとしてある他ない時代」(II.436)の中で、孤立した個人の生は吹き飛ばされて、散り散りに断片化してしまっている。人間はお互いの結びつきだけでなく、自分自身との結びつきさえも見失ってしまっている。ベンヤミンは、「映画では、人間は自分自身の歩みを認識せず、蓄音機では自分自身の声を認識しない、実験がこれを証明している」と言うが、カフカを「こうした実験で被験者がおかれる状況」において捉えている。

> 彼に勉学を命じるのは、この状況である。おそらくカフカは、その際自分自身の存在の断片につきあたっているが、それらはなおもまだ役割の連関のうちにある。彼はもしかしたら、失われた身振りを捉え得るのかもしれない〔……〕。彼は自分自身を理解するのかもしれない。だがそのための努力が何と巨大なものとなったろうか！忘却というものから吹き出して来るのはひとつの嵐なのだから。そうして勉学とは、忘却に立ち向かう騎行なのだ。(II.436)

ベンヤミンは、『田舎医者』冒頭の小品「新しい弁護士」[26] に、こうした「順風」の方向から「反転」する姿勢を見いだしている。かつてアレキサンダー大王の軍馬だったブツェファルスが、今は弁護士となっているという奇妙な設定でこの話は始まる。今やアレキサンダー大王の治世の時代ではないが、「ブツェファルスの世界史的意義も考え合わせるとき、これを暖かく迎えてあげねばならぬ」ということで、彼は弁護士事務所から受け入れられている。ブツェファルスの「世界史的意義」は、何よりも数々の遠征でアレキサンダー大王を支え、インド遠征にまで進撃したことだろう。だが現代は、インドに向かって進撃するほど野蛮な時代ではない。「ひとを殺す方法を心得た人間」がいないわけではないが、しかし以前ほど野蛮ではないと思われている。ところで「あの当時ですら、インドの門は到達し難いものではあった」が、現代と違って「その方向が、大王の剣によって示されていた」。現代では、剣を振り回す人間は多いにせよ、その方向にしたがっても「眼がちかちかするだけの話である」。それゆえ、ブツェファルスは、今では、「アレキサンダー戦の騒擾」をよそに、法律書に読みふけっている。

この話については、例えば、目的を失った現代のていたらくに対する批判であるとか、本を読みふけるだけの知識人の無力を皮肉っているものだとかいう解釈も成り立つ。が、ベンヤミンは、ヴェルナー・クラフトの解釈を受けて、この話に、アレキサンダーのような英雄を失ってもなお現代にまで生

---

[26] Kafka: Drucke zu Lebzeiten. S251f.

きている神話的な願望へのカフカの批判的姿勢を読み取っている。[27]

この神話批判からさらに進んでベンヤミンが強調するのは、ブツェファルスが「嵐のように前進していく征服者から放たれて--道を引き返している」（II.437）ことである。ブツェファルスは「反転の達人」として挙げられているのである。「神話的な英雄」の征服願望はとどまるところをしらず、前進する中で騒擾を巻き起こしつづけてきた。カフカの叙述からは、現代においてもこうした神話的前進は依然としてなされようとしていることへの危機感も伺えるし、剣が指し示す「前進」という方向に従うべきでないことをカフカが暗に表明しているのは明らかだ。今や武器は剣ではなく毒ガスであり、馬もプロペラ付きで空を飛ぶのであって、前進などさせては大変なことになるのだから、なおさら批判が必要であろう。馬はそれゆえに、剣の指し示す前進方向から方向転換して、正義の書を読みふけっているのである。

このブツェファルスは、「反転の達人」ではあるが、しかし、今や本を読む馬である彼は走ることをしない。彼の批判的な方向転換はたしかに正しいものだが、彼はもはや「逃走」する者ではない。いまや法律家である彼の「勉学」が「逃走」を助けるものなのかというとそれも定かではない。正しい方向を示すことと、「逃走」＝「騎行」を促すこととは別のことなのである。ブツェファルスは無闇に走るには賢すぎる。「逃走」の助力になるのは、賢い者、考えるものではなくて、実際に走っている者ではないだろうか。その意味でいうと、「騎行」の達人あるいは「助手」は、「反転」して引き返した先でまた別に探さなければならないのである。前進の方向に逆らって引き返した先にベンヤミンが見出すのは、或る種退行的なものであり、「愚かさ」や馬鹿馬鹿しい機知である。

[27]クラフトはアレキサンダー大王が指し示した「インドという神話的な人間の大いなる目標」をカフカが批判的に捉えていると考えている。彼の考えによれば、カフカはこの話のなかで「すでに往時にあっても実現の可能性からほど遠く…したがってまた、いつの時代にも実現され得ないものであるということ」を示唆し、そうした神話的目標の喧噪から背を向けたブツェファルスの勉学と「正義」を待つ姿勢をよしとしている。Kraft, Werner: Franz Kafka. Durchdringung und Geheimnis. Frankfurt am Main 1968. S.13-15. ベンヤミンは神話批判という点でいえば、クラフトの解釈を受け入れている。

５　「騎行」を成就させる愚かさ

ベンヤミンは、あの「隣村」の老人の兄弟として、或る小咄に出て来る「乞食」について語っている（もともとこの話はエルンスト・ブロッホが紹介したものだが、ベンヤミンはそれを再度語り直している）。そこで「乞食」は、まことに奇妙かつ馬鹿馬鹿しい仕方で願望を成就させている。ベンヤミンはこの乞食を、「騎行の達人」として考えている。

> 或るハシディズムの村のみすぼらしい居酒屋で、安息日明けの晩にユダヤ人たちが座っていた。誰も知らない一人の男を除いて、彼らは村に住んでいた。その男はまったくみすぼらしく、ぼろをまとっていて、隅っこの暗がりの奥にうずくまっていた。あちこちでは、おしゃべりが行われていた。一人が、自由に何か望みがかなうとしたらいったい何を望むか、と話を持ち出した。一人目は金をほしがり、二人目は婿をほしがり、三人目は新しいカンナかけ台をほしがり、そのように話の輪が回っていった。みなが喋ったが、隅の暗がりにはまだ乞食が残っていた。彼は不承不承ためらいながら問いに応じた。「わしは自分がとても強い王様だったらと思う。そうして、広い国を治めて、夜はごろごろと自分の宮殿で眠れたらなあ。と、突然国境から敵がやってきて、夜が明けるより前に、騎兵たちがわしの城の前まで押し寄せ、それへの抵抗もなく、わしは驚いて飛び起き、服を着る間もなく、シャツのまま、わしは逃げなきゃならず、山を越え、谷を越え、森を抜け、丘を飛び、休みもなしに、昼間から夜まで追われ続け、おまえさんがたのとこの、この端っこのベンチで救われるのだったらなあ。このようにわしは願うがね。」他の者は、わけがわからず、顔を見合わせた。一人が聞いた。「それで、おまえさんの願いから、何が手に入るのだろうね？」答えるに「シャツが一枚」。(II.433)

ブロッホによる話では実際、乞食が「王のシャツ」を手に入れるところま

で語られている。[28] 「隣村」の老人においては、「騎行」は繰り出されさえしなかったが、それに対してこの乞食においては「過去へ向かっての騎行」という形で「逃走」の果てに願望が成就しているとベンヤミンは解釈する。

乞食は、未来に投影する願望を、「王であったならば」という形で過去へと方向転換することで、「シャツ一枚」というほとんど無であるような形の成就をえている。「彼は、その話の中で入り込んだ逃走という普通でも幸運でもない生においては、願望の心配をしなくてもよく、願望と成就とを取り替える」（II.434）。現実にはシャツの一枚さえ手に入れられない乞食が、王となって願うのは、奇妙なことに「逃走」の成就である。この王は宮殿の暮らしや豪奢な服まで失って、シャツ一枚で逃げ出すはめにおちいっているが、実際こうして端っこのベンチにたどり着いているのだから、実際「逃走」の願いは成就している。「逃走」が成就、つまりは「願望」が成就しているのだから、それなら「王のシャツ」も着ているはずだろう。もちろん乞食が着ているのは、ただのボロなのだから、馬鹿馬鹿しいことではある。しかし乞食は機知によって、実際彼が王でありえないこともないかもしれないと半ば思わせてしまう。

カフカは、「ジレーネたちの沈黙」で、「不十分な、どころか、子供っぽい手段でさえが、救いに役立つことがある」ことを示したが、ベンヤミンもここで乞食によって同様のことを示している。馬鹿馬鹿しい機知に含まれている快活さは、「逃走」の助けになる。もちろん、乞食の話は冗談にすぎない。しかし、これは馬鹿馬鹿しいようだが「願望の心配をしなくてもよい」者は全速力で逃走することができることを示唆してはいるように思われるのである。もちろん、このような「逃走」は、世界の救出となるものではない。だが、「力でもって世界を変える」ことはないにせよ「世界をほんの少しだけ正す」（II.432）ものではあり得るだろう。乞食の快活さは、いまだ逃走できない者たちにとっての希望の担保となるのであり、そのことによって「世界はほんの少しだけ」正される。

実際ベンヤミンは、乞食の話が見せているような馬鹿馬鹿しさ、あるいは「愚かさ」が、カフカにおいて最も重要なものだと、後にショーレム宛ての書簡で述べている。当時のベンヤミンは、例えば「経験と貧困」（1933）で述べているように、かつての世界では老人が若者や子どもたちに伝えていたであろう「経験」＝人生の教えが、通用しなくなっていると考えていた。ものすごいスピードで進む大規模な社会変動の中で、「経験」や「教え」は崩壊する。カフカの作品もこのような状況下で書かれたとベンヤミンは考えている。例えば、カフカはルドルフ・シュタイナーの思想、あるいはシオニズムのような新たな「教え」、「真理」を求めているようにも見える。だがベンヤミンによれば、カフカは結局のところそうした新たな「教え」に安住することはなかった。「真理」が崩壊し、惑う中で、カフカが語るのは「叡智」ではない。

> カフカにあっては、もはや叡智については語られない。ただ叡智の崩壊の所産だけが残っている。その所産は二つあって、そのうちのひとつは、真なる事物に関しての噂である。〔……〕こうした状態のもうひとつの所産は愚かさだ。こちらは、たしかに叡智に属するような内実を残りなく無駄に費やしてしまっているが、その代わりに、人好きのすることろ、落ち着いたところを保持している。こういうところは噂にはみじんもない。愚かさは、ドン・キホーテから助手たちを経て動物たちにまで至る、カフカの愛するものたちの本質をなしている。[29]

「神智学」（あるいは「人智学」）などは、おそらく「真実の事物についての

[28] ちなみに、ブロッホとベンヤミンの語りを比べてみると、シナゴーグが居酒屋になっているなど細部において色々と違いが見られる。だが一番重要なのは、時制の違いだろう。ブロッホの場合、乞食の語りは、最初願望文ではじめられ、最後には現在形に移行している。ブロッホの解説に従えば、「言葉のこみいった移行を媒介にして、語り手である乞食は、願望文ではじめ、歴史的現在を経由しつつ、突然実際の現在形を用いる。この現在形は、聞き手が今いるところへ着地するときに、聞き手をいくらか追い越している」。Bloch, Ernst: Spüren. Frankfurt am Main 1969, S.99. ベンヤミンの場合、乞食の語りは全て接続法である。

[29] Benjamin: Gesammelte Briefe. Hrsg.von Christoph Gödde und Henri Lonitz. Bd.VI. 2000 S.113 (an Gerschom Scholem 1938 年 6 月 12 日).

噂」に数えられるものだろうが、ベンヤミンによれば、こうしたものは「叡智の崩壊の所産」であり、或る意味では「真の再生」ではなく「メッキ」にすぎない（II.215）。ベンヤミンは、こうした真理に関する「噂」、「智慧」の擬製品ではなく、真理の崩壊をそのまま示すような「愚かさ」を肯定する。一見すると奇妙な事ことだが、ベンヤミンは「愚かさ」に「希望」があると考えている。

> 「おお、希望は十分に、限りなくたくさんの希望がある。--ただわれわれのためにではない」。この［カフカの］言葉は、カフカの最も奇妙な登場人物たちへと橋をわたす。彼らは、唯一家族のふところを逃れており、彼らにとってはおそらく希望がある。〔……〕「助手たち」は、実際この輪から抜け落ちている。この助手たちは、カフカの全作品を貫いている一つの形象グループに属している。こうした輩としては、「観察」の中で化けの皮を剥がれるいかさま師、夜にバルコニーでカール・ロスマンの隣人として現れる学生、そしてまた、南の町に住んでいて疲れることのない愚か者たちが挙げられる。（II.414）

ここでベンヤミンが「助手」として挙げているものたちは、実際のところ、何の助けになっているのかわからないような存在ばかりである。「化けの皮を剥がれるいかさま師」は言うまでもなく、「南の町に住んでいて疲れることのない愚か者たち」も、『城』の助手たちがそうだったように、役に立つことなど何もしてはくれないだろう。あの「学生」も、実際カールを助けてはくれなかった。彼は、ただ「電光石火」の速さの奇妙で滑稽な身振りを見せてくれただけである。だが、こうした滑稽で愚かな身振り、何の役にも立たなそうな「勉学」のために眠らずに机にかじりついている姿に、ベンヤミンは希望の芽を見ている。たしかに先に見たように学生の勉学には希望がなさそうだったが、そうした身振りは、誰かを助けるものではあるかもしれない。ベンヤミンは次のように言っている。

> カフカにはつぎのことだけは確かだった。第一に、助けるためには、ひとは愚か者でなければならぬ。第二に、愚か者の助力だけが、ほんとうに助けになる。不確かなのは、その助けがまだ人間に有効かどうか、という点にすぎない。[30]

だがどのような意味で、愚か者が助手となるのだろうか？そして、なぜ助けるためには愚か者でなければならないのだろうか？

６　「空虚で愉快な旅」

ベンヤミンは、例えばドン・キホーテの従士であるサンチョ・パンサを「助手」の鑑と見ている。夢想に取り憑かれた中年の騎士は、愚かなこの助手の助力を得て「空虚で愉快な旅」を敢行し、サンチョ・パンサ自身もこの旅を楽しんだ。彼はこのような見方を、カフカが書いた「サンチョ・パンサについての真実」から引き出したのだが、そこには次のようにある。

> サンチョ・パンサは、決してそれを自慢したことはなかったが、長い年月の中で、夕刻から夜にかけて、後に彼がドン・キホーテと呼んだ彼の悪魔に多くの騎士道小説や盗賊小説をあてがうことで、悪魔を自分からそらすに至った。そうして、この悪魔ドン・キホーテは、狂気の沙汰を行ったのだが、狂気の沙汰が向かうべく定められていた対象--まさにサンチョ・パンサがその対象となるはずだったろう--を失って、無害のままにとどまり、誰も傷つけなかった。一人の自由人であるサンチョ・パンサは、落ち着いて、おそらくは或る種の責任感から、旅するドン・キホーテに従った。そして、そこからその最後まで、大きく有益な愉しみを得たのだった。[31]

---

[30] Benjamin: a.a.O.
[31] Kafka: Nachgelassene Schriften und Fragmente II. S.38.

サンチョは、しばしばドン・キホーテの夢想的理想主義に対する現実的生活感覚を示すものとして理解されるが、カフカ、そしてベンヤミンはそうした理想／現実といった二分法においてサンチョを見てはいない。カフカの記述に従うなら、むしろドン・キホーテの夢想と狂気とは、元来サンチョ自身の悪魔として、彼に内在していたものであるように思われる。ドン・キホーテの「狂気」は、サンチョにとって決して人ごとではない。「狂気」は、自分とは無縁なものとして切り離してしまえるものではないのである。

卓抜な仕方でドン・キホーテとカフカを論じたマルト・ロベールは、「ドンキホーティスムの真髄」、『ドン・キホーテ』という作品の真髄は、「夢想」に「現実」を対置して、一方を嘲笑するような風刺的態度にあるのではないと言っている。「あれかこれか」を迫る風刺的態度の二分法と違って、「ドンキホーティスムがとる手段は、皮肉や嘲笑ではなく、敬虔とイロニー、尊敬とユーモア、賛美と批判、感動と厳正である。つまり、ドンキホーティスムは、諷刺の絶対的なあれかこれかを、不条理に境を接するまでに維持される悲痛なあれとこれとによって置き換えるのである」。[32] ドン・キホーテの狂気は崇められるべきものではないが、また嘲笑されるべきものでもない。敬意を払われるべきものと、真剣に受け取られるには値しないものとの間の境界上をドン・キホーテは疾走する。ドン・キホーテは、自らの狂気を「精確に、明晰に、そしてその憤慨にもかかわらず主人の権威を思わせる辛抱強さでもって」自らの助手サンチョに解説する。[33] 「助けるためには、愚か者でなければならない」とベンヤミンは言っていたが、たしかに、なまじ賢い者であれば、このような狂気にはつきあっていられるものではない。その意味でサンチョのような愚か者にしてはじめて、助手が務まるのだと言える。この狂気は笑いを誘うが、敬意を求めてもいる。サンチョ・パンサが助手としての範型をなすのは、狂気を笑いに転化させながら、同時に敬意をもってこれに伴走していることによる。助手の役目は、「狂気」に対して、啓蒙的に「現実」を突きつけることにあるのではなく、「狂気」に合いの手を入れながら伴走していくことにある。ベンヤミンは、妄言に妄言を重ねながら並走する二人をローレルとハーディになぞらえ、さらにカフカとブロートの間にあったのもこのような関係ではないかと示唆しながら、次のように言っている。

> カフカとブロート　ローレルと彼のハーディ〔……〕カフカが、ブロートおよびその深いユダヤ哲学的言辞に対してもつ関係は、ちょうど、サンチョ・パンサが、ドン・キホーテとその騎士道という深遠なキマイラに対しての関係のようだ。カフカは、自身の体にしかるべき数の悪魔を住まわせていたが、それらがしからざる形をとって、また失態やまずい状況の形をとって、目の前ではしゃぎまわるのを見るのを喜ぶことができたのだ。おそらくカフカは、自分自身に対して責任を感じるのと同様、いやそれ以上に、ブロートに対して責任を感じていたのだ。(II.1220.)

カフカとブロートの関係が果たしてベンヤミンの言うとおりのものだったかはわからないが、ここでは、ベンヤミンが、カフカを狂気と並走するような人物であったと見ていることを確認しておきたい。愚かなサンチョは、狂気とつきあうことで自らの生と自らの騎行をその終わりまで楽しむことができた。彼らの旅は、狂気の道を馬鹿馬鹿しくも快活に歩んでいく「空虚で愉快な旅」である。

> 馬を多くつなぐほど、車は速く走る--といっても［馬がつながれた］台座からその止め棒をもぎとるのは無理な話であって、牽き紐がちぎれ、

---

[32] マルト・ロベール『古きものと新しきもの』城山良彦、島利雄、円子千代訳　1973年法政大学出版局、28頁。

[33] 「お前に言ったではないか」と彼はまさに狂気に陥ろうとする危機的な瞬間にサンチョに説明する。「私はアマディースのまねをして、ばかさわぎと捨てばちと狂乱とを演じたい。同様にドン・ロルダンをまねるつもりなのだ、と……だからわが友サンチョよ、これほど奇抜で、まことにすばらしい、およそ類を絶したまねをやめさせようと、無駄に時を過ごさぬがよい。私は気違いだ。気違いでなければならないのだ」。ロベールより重引。前掲書 14 頁。

あとは馬だけの空虚で愉快な旅[34]

サンチョたちの旅の引き馬はドン・キホーテの狂気であった。騎士道小説という人参を甚大な量あてがわれたこの馬は、ドン・キホーテの現実的生を引きちぎって、「空虚で愉快な旅」に突っ走った。サンチョは主人の夢想的願望を実現させるための助手としては、むしろ失格している。が、彼の助手としての役割は、狂言回しとして、ドン・キホーテの願望がほとんど狂気だということを笑いとともに示すことにある。この笑いは狂気を必ずしも否定しない。愚かな助手の合いの手は、狂気の射程距離をわれわれに提示し、われわれは狂気がどこまでも突っ走っていったことに驚愕しつつ笑う。そうして、狂気の軌道を追って、われわれのうちにある「小さくて把握しがたいが、そこにあって押し殺されず、眠らずにいるものの幾ばくか」のものも走り出そうと動き出す。

7　狂気の疾走

「狂気」は、愚か者の合いの手なしには、その射程を十全に示すことはないだろう。それは賢人によって啓蒙され、善導されるべきものでも、諷刺によって嘲笑されるべきものでもない。「愚か者の助力だけが、本当の助力であり得る」とベンヤミンが言ったのはこうした意味においてである。あのバルコニーの「学生」も、十分滑稽なはずのその身振りを、世間的な賢さによって撤回してしまわずに、十分に愚かなその身振りを貫徹させていたらば、カールにとっての助けになったかもしれない。だが学生は「助手」としては中途半端に賢く、また中途半端に愚かな存在だったのだ。「勉学」が成就しないという彼の不安も、中途半端な賢さが、自らの狂気の疾走を阻んでいるがために生じている。彼の「勉学」はベンヤミンによればいわば「無」であるが、しかしながら、この「無」としての「勉学」には何かの役にたつ可能性もないわけではなかったのである。ベンヤミンは次のように言う。

> おそらく、こうした勉強は無だったのだ。だが、これはあの、何かをはじめて役に立つものにする無に近い--つまりタオに近い。カフカはこのタオを追ったが、その際に次のような願望を抱いた。「几帳面に秩序だった職人の技とハンマーでもって一つの机をたたき上げること。そして、その際同時に何もしないこと。しかも、それゆえに、＜彼にとって、ハンマーを打つことは無である＞と言われるのではなく、むしろ、＜彼にとって、ハンマーを打つことは実際ハンマーを打つことであり、かつ同時にまた無である＞と言われることができるような具合に。それによって、ハンマーはいっそう鋭く、なお決然と、なお現実的になって、そしてこういいたければ、なお狂気を孕んだものとなったといえるだろう」。そして、学生は勉学の際に、このように決然とした、ファナティックな身振りをする。これ以上に奇妙な身振りは考えられない。書記たち、学生たちは、息をきらしている。彼らは、ただそのようにして疾駆していく。（II.435）

あの「学生」は、ここでベンヤミンが言うような具合に決然とはしていなかった。彼にとって、いまだ「ハンマーを打つことは無である」という具合にとどまっていた。おそらく「学生」は、その滑稽でファナティックな身振りが疾駆するまでに、決然とハンマーを打たねばならなかったのである。「順風」の吹く先にちらちらする「目標」にひきつけられつつ、世間的賢さとのバランスをとりながら、ハンマーを打ったのでは、何かの役に立っているようでありながら、実際何の役にもたたない。無であるかもしれないが、決然としたファナティックな身振りで打たれるハンマーであってはじめて、「何かをはじめて役に立つものにする」ことができるのではないか。学生自身は、ドン・キホーテよろしく、狂気にみまわれて無に帰するだけかもしれない。が、その人間がもし決然とハンマーを打っているとしたら、それを見る人間は何か快活なものを感じるのではないか。そうして、そこから希望をとり出してく

[34] Kafka: Nachgelassene Schriften und Fragmente II. S.123.

ることがあり得るのではないか。カールも、学生の身振りがもっと狂気に満ちていたなら、あるいは「逃走」の希望を彼から引き出していたかもしれない。カールは、彼がただ「逃げろ」と言ってくれなかったことを悲しんでいる。[35] ただ「逃走せよ」「騎行せよ」というだけの愚かな助言が彼にとって一番の勇気を与えるはずのものであった。そうして、それによってカールは「インディアン」のように走り出し、それを天使たちも祝福してくれたのかもしれないのである。

> 「……ついには拍車を投げ捨てるまでに、だって拍車はないんだから、そしてついには手綱を離すまでに、だって手綱などないんだから、そうやって駆けるんだ。そうして刈られた荒野のように前に広がる大地はほとんど目にもとまらなくなって、もう馬の首も、馬の頭もなく」。このように、至福の騎手の想像は成就へと向う。彼は、空虚で愉快な旅の途上、過去に向かって轟々と突進し、彼の馬にはもはやいかなる重荷もない。（II.436）

「順風」によって未来の方向に吹き付けられて行き着く先は「袋小路」でしかなかった。カフカ的な「騎行」は、そこからいわば過去の方向、文明の智慧が廃棄した快活な愚かさが見出される方向へ反転し疾駆していく。この空虚で愉快な旅は、もはや走っているのが馬なのか、それとも人間なのかわからないほどに疾駆する。だが、「順風」に追われての余裕のない速さではなく、「自身の旅の掟」に従った落ち着きをもって進む。馬は、自身を縛り付ける重荷を欠いており、人間は、走ることを抑制する賢さを投げ打っている。

> 背中から重荷が取り去られていさえするならば、人間であるか、馬であるかは、そう重要なことではない（II.438）

[35] 「カールは黙った。この大学生は、カールなんかよりずっと世間を知っているし、…たしかにカールにたいしては好意をしめしてくれた。だが、ドラマルシュのところから出て行け、という激励の言葉はひとこともカールにかけてくれないのだ」。Kafka: Der Verschollene. S.350.傍点引用者

ベンヤミンは、エッセイをこのように締めくくっている。

終わりに

ベンヤミンはショーレム宛の書簡の中で、「カフカの定言命法」として、「天使たちになすことを得させるように、行動せよ」という定式化をしている。[36] このときベンヤミンの念頭にあったのは、カフカが引用したというキルケゴールの次の文章である。

> 何か幼稚なるもの etwas Primitives を伴う定めにあって、それゆえ、「あるがままの世界を受け入れねばならぬ」とはいわずに、「世界がどうあろうと、私は自らの根源性のもとにとどまり、その根源性を世の判断にしたがって変えようとは思わない」という人間。彼が現れるや否や、そしてこの言葉が聞かれるその瞬間に、そこに存在するもの全部のうちで、変化が起こる。メルヒェンの中で言葉が発されて、何百年も魔法にかけられた城の扉が開き、全ての生が開かれるような具合に、そこに在るものは、注意深さそのものとなる。天使たちは仕事を得て、そこから起こってくることに心を占められて、これを興味ありげに眺める。他方では、長いことだまってそこに座って指をくわえていた暗い不気味なデーモンたちが、飛び出してきて、関節をのばす。デーモンたちが言うことには、俺たちのためにも何かありそうだということで。[37]

この「世界がどうあろうと、私は自らの根源性のもとにとどまり、その根源性を世の判断にしたがって変えようとは思わない」という、或る意味で愚鈍な台詞は、「おまえと世界との闘いでは、世界の味方をせよ」[38] というカフカ自身の言葉と合わせて考えねばならないものだろう。「根源性」の側につ

[36] Benjamin: Gesammelte Briefe. Bd.VI. S56(an Gerschom Scholem. 1938 年 4 月 14 日).
[37] ブロートからの重引。Brod, Max: Über Franz Kafka. Frankfurt am Main 1974, S.150f.
[38] Kafka: Nachgelassene Schriften und Fragmente II. S124.

くという叫びが注目に値するものとなるのは、その人間が、「世界」と自らの「根源性」との間の緊張の中で、そうした決断をくだすときだろう。そのようなときにはじめて、何かが変わって、天使たち、デーモンたちの気を引くのであり、また閉じた領域から、外部へと「逃走」しようという「騎行」が人に希望を与えるものとなる。カフカの天使たちは『アメリカ』でも、また「最初の悩み」を目撃する際にも、為すことなく指をかんでいたが、もしここで聞かれたような形で「根源性」の側につくという決断がなされたならば、彼らを祝福するべく注意深く見守るという仕事を得ていたかもしれない。デーモンも、あの「学生」にとりついて、彼の身振りをもっと狂気に満ちたものとさせたかもしれない。

天使も悪魔も救済を約束はしない。閉域の「外部」には「救済」の「約束」がぶら下げられているわけではない。それにも関わらず「騎行」はなされるのだし、また走っているならば「救済の約束」など問題にせずともよいのだろう。馬は「約束」のために走ることなどないものだし、実際に走っているのならば、そして「重荷が取り去れていさえすれば、人間であるか、馬であるかは、そう重要な事ではない」のだから。ベンヤミンがカフカにみた「騎行」は、このような疾駆のイメージを浮かび上がらせる。そして、自身もいわば「挫折者」であったベンヤミンがこのような「騎行」のイメージをとり出したということのうちには、多くの「希望」が孕まれている。